教主さまお作 灰釉茶盌 銘「天馬」

【弥仙山金峰山土 梅松館木の花桜釉】

平成30年（2018）

阿づまの光

10月号・Oktobro

大本東京本部
開設50周年

題字 出口直日

通巻第595号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒

〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

世の中の出来事は皆、天からのメッセージ

総務管理課長　椎野 恭三

この数カ月の間にさまざまな自然災害が起こっています。6月には震度6弱の大阪北部地震、7月には広範囲で河川の氾濫や浸水、土砂崩れを引き起こした西日本大豪雨、7月、8月には連日40度を越える酷暑。そして9月に入ると震度7の北海道胆振東部地震と、連日のように甚大な被害のニュースが駆け巡っています。犠牲になられた方々の霊界でのみ救いと、避難生活や被害に遭われてご苦労されておられる方々に、心からお見舞い申し上げます。

同時に、スポーツ界のさまざまな問題点も明るみに出てきました。レスリング、アメフト、ボクシング、体操等々、各協会、分野で不具合を知らせるための警告が、表に出てきています。

世の中に出てくるさまざまな出来事を人体に例えると、体の不調や不具合をかかえる時、その原因をたどれば、食生活や仕事、人間関係等々、生活の中での改善を知らせるメッセージが含まれていることがあります。それと同様に、天災も人災も含めて、日々起こる出来事は、世の中が変わらなくてはならない天からのメッセージであり、かつ他人事ではなく、自分自身を省みる警告、メッセージではないでしょうか。

教主さまには、本年の瑞生大祭で先の災害に加えて、世界的問題となっているマイクロプラスチックによる海洋汚染のことにも触れられ、「元はといえば人類自らの利益や便利の飽くなき追求に起因するもので、現在の自然環境のみならず、子孫に引き継ぐべき未来の環境をも破壊し続けることに対する責任は、私たちが負うべきものであり、自分自身の日常の在り方そのものを問い正し、生活を根本的に見直さなくてはなりません」とお示し下さっておられます。

私たちはあの東日本大震災から、何が変わったのでしょうか。未曽有の大震災を経て、今なお、天の神さまは、私たちにこれでもか、これでもかと警告を発せられているのではないでしょうか。

今月の聖言

一日だも神の守りのなかりせば
世はとこしへに闇となるべし

出口王仁三郎聖師

合気道は世界の架け橋

～王仁三郎と植芝盛平～

大正８（1919）年、出口王仁三郎聖師と植芝盛平翁は出会います。その後、盛平翁は王仁三郎聖師に師事し、宗教思想に深い影響を受け、「愛と和合の武道」に基づく新しい武道の体系を築いていきます。人類愛善の精神と合気道について学びます。

出口王仁三郎と盛平翁の出会い

合気道二代道主・植芝吉祥丸先生は、「植芝武道の完成に最も大切な、忘れてはならないことは、出口王仁三郎聖師の直接的な指導による精神的、言霊の妙用の鍛錬による開眼であります」とおっしゃっておられます。盛平翁にとって王仁三郎聖師は、合気道を確立する上で、なくてはならない存在でした。

盛平翁は明治16年12月14日に和歌山県田辺市に生まれました。明治45年、29歳の時に北海道紋別郡白滝村に開拓団として入植。人望も厚く、白滝村の村会議員まで務めています。そのころ、武田惣角師の大東流柔術に出合い、武田師の武道を熱心に学んでいました。

北海道入植から8年後の大正8年12月、「父危篤」の電報を受け、和歌山に帰る途次、車中で相席になった人から「奇跡を起こす大本」という話を耳にします。父親の危篤のこともあり、大本に立ち寄り病気平癒の祈願をしようと、実家へ向かわず京都の綾部に直行しました。

盛平翁は当初、大本は田舎の小さな教団であろうと思っていたようですが、広大な土地に立派な建物がたくさん建っているのに大変驚いたそうです。金龍殿という建物で父親の病気平癒のご祈願をしていると、奥からゆったりと出てこられたのが王仁三郎聖師でした。

聖師は盛平翁の顔を見るや「何か見えましたかな?」と尋ねられました。盛平翁は「はい、肉付きの良い父でありましたが、今は何か透けるように細くなった父が…」と言うと、王仁三郎聖師は「お父さんはあれで良いのや」と答えました。

盛平翁は、父の危篤がどう良いのだろうと疑問に思い、何か深い意味が含まれているような気がして、そのまま3日間、綾部に滞在。大本の話を聞くことにしました。その中で、「人はいかなる方法にても死という関門を超えて霊界へ復活しなければならない。死ぬということは霊界への生まれ変わりであり復活である。ゆえに神の目から見れば、永遠に生き通しである」との教えが一番心にしみ込んだそうです。そして「お父さんはあれで良いのや」という王仁三郎聖師の言葉は、父の天寿のことであり、父の天寿を受け入れて、霊界での幸福を祈り最善の供養を尽くすようにというお諭しであったと悟られたのです。

植芝塾の設立

父親の昇天後、盛平翁は一家を上げて綾部へ移住します。綾部に到着し、王仁三郎聖師にあいさつに行くと、聖師は「あんたは日本一の武道家になるお人や。あんたは今までの武術に捕らわれることなく、植芝流でいきなはれ。真の武道とは愛善の道のためにある」と言われました。

それ以降、盛平翁は明確な目的意識のもとに大本での奉仕生活を始めました。そして大正9年、王仁三郎聖師から、「そろそろ植芝道場を開いてもらわんと。心置きなく武道に励むことが神さまの真意です」と言われ、横文字で「植芝塾」と大きく書かれた額を頂かれました。

盛平翁は、道場を立ち上げ、稽古に通う弟子たちをうまくまとめて武道に励みました。ときには、王仁三郎聖師から「植芝さん、槍はこう突くんやでな、竹はこう切るんやで」と、直接指導を受けることもありました。

あるとき、献労の人たちが3、4トンもある大きな岩を掘り起こして移動させようとしているところに盛平翁が通りかかり、「植芝さん、よう来てくれた。あんたの強力でこの岩を動かしてくれんか」と言われると、「そんな大きな岩を動かすことはでいないよ」と言っているところへ王仁三郎聖師が現れ、「植芝さん、やってみなはれ。これはな、『ウ』の言霊でやるんやで」と言われました。

言霊とは、日本では古来、言葉には力があり、魂が宿るとされ、「言霊の生ける国」「言霊の幸はう国」などと言われています。盛平翁は聖師の言葉を信じ、両手を大岩にあてて、「ウーー」と言霊を発してやってみると、その大きな岩がズズズっと動いたというのです。

こうして、王仁三郎聖師から「神人合一」の神力というものを直接、教わっていきました。

王仁三郎とともにモンゴルへ

大正13年、王仁三郎聖師は突如、モンゴルへと出発します。目的は、万教同根、人類愛善の理念のもとに、アジアを精神的に統一し、世界平和の実現を目指すという広大なものでした。随行として盛平翁を含む3人がお伴をしました。

王仁三郎聖師は、ゆく先々で病気に悩んでいる多くの人たちに祈願を凝らし、次々と治していきました。また、炎天下の草原に雨を降らせるという奇瑞を見せるなど、大活仏神、生神さまと崇敬を受

～21世紀・生きがい講座～

七良浴 大吉（しちろうたに だいきち）（京都府合気道連盟副会長）

けました。盛平翁も時間の許す限り現地の人々に自分の得意とする柔術の稽古をつけました。

ところが旅も半ば、一行はパインタラで捕らわれの身となり、郊外の銃殺場に連れていかれました。王仁三郎聖師は「昇天の時が来たんじゃ、わしはこれから天国に昇って霊国天人となり、日本のみか世界を守るぞ。お前たちはみんなわしから離れんようになぁ、一緒に霊界に行くんだぞ」と言い、皆も王仁三郎聖師の言葉にその気になっていました。

ところが、十人近くの銃殺兵が今にも撃とうと構えていたところ、不思議なことに全員の銃の引き金が引けず、故障してしまいました。その直後、日本の領事館が駆けつけ、すぐに銃殺刑は中止。全員、無事に帰国することができました。

約130日のモンゴル進出で、盛平翁の霊格はますます磨かれていきました。

元大関・天竜の入門

昭和2年、「あんたはいずれ天下を風靡（び）する大武道家や。もう綾部にだけ居ついたらあかん。大本を離れて一道の開祖になる段階にきている」との王仁三郎聖師の言葉を受け、盛平翁は一家を上げて上京。盛平翁44歳の時でした。

東京に進出して圧力を掛けてきた人があります。それは日露戦争で武勇伝を発揮した三浦将軍です。三浦将軍は、盛平翁が大東流の武田惣角師の一門でありながら勝手に分派、独立したと誤解して、植芝道場を潰す勢いで、陸軍将校のつわ者を集め、道場破りを企てました。

盛平翁の弟子たちは心配しましたが、盛平翁は全く動じません。それどころか、「一人一人ではなく、皆で一緒にかかってきなさい」とけしかけました。すると、連中もさすがにカーっとなり、最初の一人が猛烈な勢いで向かってきました。ところが、あっという間に尻もちをついて後ろにひっくり返ってしまいました。それを見て今度は4、5人が一斉に飛び掛かってきました。これも飛翔のごとき速さで体に触れることなく、一瞬にして突き飛ばしてしまい、軍人たちは舌を巻いて感服してしまったということです。

またあるときは、軍人会館で公開武道会が行われ、東西最強の名人・達人といわれる武道家たちの前で、盛平翁が演舞を行いました。それが流れるような鮮やかさであったために、「八百長じゃないのか」とざわめきました。

私自身、盛平先生に稽古をつけていただき、何度も投げられましたが、八百長でできるようなものではありません。

盛平翁は、「それではどなたか力いっぱい掛かってみなされ。合気は試合をすると危険だから、このように型だけにしとるんじゃが、今日は名だたる武道家ばかりだから、少しだけ真剣にやりましょう」と言われました。

そこへ、元大関の天竜三郎氏が選ばれて、大きな天竜が小さい盛平翁の前に現れました。「ほう、あんたが天竜さんか。大きいのう。では、あんたに私の左の手首をあげるから、力いっぱい好きなようにしなさい」と左手を差し出しました。

天竜は「大したことはないだろう」と、盛平翁の手首を握った瞬間、「こりゃいかん」と直感的に思ったそうです。しかし皆の代表でもあるし、引くに引かれず、「よしっ」とばかりに渾身の力を入れて掛かっていきましたが、一瞬のうちにへたばりこんでしまったそうです。天竜は両手をついて「参りました」と謝し、盛平翁に入門しました。

愛善世界建設こそが合気道の主眼

このように、昭和2年から15年までの草創期は、こういう試合が非常に多かったようです。たちまち「武道界に植芝あり」との折り紙がつけられるようになっていきました。

ある時、盛平翁にある人が質問しました。「植芝先生、合気道には攻撃はないんですか？」と。盛平翁は答えました。「全世界は一軒の家なんじゃよ。地球上には他人というものは一人もいない。世界中、ことごとく家族なんじゃよ。『美しきこの天地の御姿は主の作りし一家なりけり』ということでな、この地上に楽土の建設、愛善世界の建設こそが合気道の主眼なんじゃよ。だから敵はいなし、攻撃もないんじゃよ」

盛平翁は、王仁三郎聖師の教えを吸収し、合気道を通して全世界の人々と手を取り合い、争いのない世界を築いていこうとされました。宗教であれ、武道であれ、それぞれが進む道、考える道は違っても平和を思う心は一つです。どんな人でも平和を思わない人はいません。

盛平翁が生涯をかけて願い続けた、争いのない真の世界平和に向かって、これからも手をとりあって進ませていただきたいものです。

掲載文は、平成30年5月16日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭（長寿感謝祭・交通安全祈願）ならびに秋季合同慰霊祭は、9月9日、午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、337人が参拝した。

祭員は関東教区各主会青松会員が、少年祭員は小谷遼くん、玉置巴さんがご奉仕。伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は東京主会の野月泰子さん、添釜は高野社中が担当した。

祭典後、10月8日に執行される「東京大本歌祭」の朗詠者有志により朗詠が奉納され、引き続き、猪子恒東京宣教センター長があいさつ。本日、長寿感謝祭に参拝の対象者に祝辞を述べた後、西日本等を襲った台風21号で大きな被害を受けた、天恩郷の神苑内について「数十本の樹木が被害を受けている模様。また朝陽館玄関も被害があったが、神殿を避けるように大木が倒れるなど、大難を小難にしていただき、一様に大きなおかげをいただいた」。また震度7の大地震に遭った北海道東部の被害について「現時点では、道内の信徒宅への大きな被害情報は入っていない」と報告。また、大本本部長名で各信徒に依頼している「梅松苑内建物群・敷地からの退去を求める署名」について、三十年来の経緯を説明、署名への協力と理解を求めた。最後に、「全国的に大きな災害が続いているが、あらためて一人ひとりの行いと心の中を見つめ、日々の無事をもっと感謝し反省させていただかなければならない」と語った。

引き続き、関東教区青年部が大本青年祭で様々な奉納行事に参加したようすを、映像を交えて報告。本年は、東京主会青年部が団体総合2位、茨城主会青年部が団体総合5位の成績を収めた。

続いて、「長寿祝賀式典」が行われ、列席者18人（写真）を紹介。遠藤三智子直心会埼玉連合会長から祝辞と記念品の授与があり、列席者を代表して、茨城主会の小黒美智子さんが記念品を受取り、栃木主会の佐藤栄さんが答辞を述べた。なお、本年の関東教区の長寿該当者は、白寿3人、米寿38人、喜寿57人。

また直会後には、矢野裕巳・国際愛善宣教課主幹による公開講演会『誰にでもわかる中東問題』（主催・人類愛善会、世界連邦運動協会関東愛善会支部）が開催された。

当日列席者＝米寿／鈴木則子（東京）、萩野谷清美（茨城）、小池智子・山内千恵・小柳津美久子（神奈川）、渕岡吹次・大久保甫佐子（東京本部直属）、喜寿／香取モト子（東京）、内藤悦子（千葉）、小黒美智子・北川宏美（茨城）、井上正男・金子和枝（神奈川）、藤塚薫（埼玉）、佐藤栄（栃木）、重友きくよ（山梨）、岡本浩子・久保田睦子（東京本部直属）

21世紀・生きがい講座

第186回「21世紀・生きがい講座」は、8月15日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、㈱酵素の世界社代表取締役専務・島本光久講師（愛善みずほ会会長）が、「農は国の大本～お土の心に学ぶ～」と題して講話した。参加者は25人（内、一般4人）。

島本講師は、大本が開教以来、土を「お土」として尊み、歴代教主さまが折に触れてその大切さを教示されていることを紹介。現教主さまも「お土を大切にする教団でありたい」と述べられてる、として、天産物自給自足の農法、土作り運動を、「愛善みずほ会」が昭和二十年代初頭から担ってきた歴史と活動を紹介した。

参加者からは「有機肥料と化学肥料の違い、土作り、酵素農法、内容の深さにおどろきです」（男性・一般）、等の声が寄せられた。

第27回 家庭平安祈願祭

日　時　10月27日（土）午前10時30分
場　所　東京宣教センター・ご神前
申込み　申し込み者は信徒・一般を問いません。ご本人に代わっての申し込みも可能です。ご希望の方には申込書をお送りします。所定の申込用紙に必要事項を明記の上、祭典玉串（任意）を添えて、所属の機関、または東京宣教センター祭務課「家庭平安祈願祭」宛にお申込みください。
締　切　10月22日（月）必着
その他　ご祈願は祭典後1週間執行します

東光苑祭典・行事予定

10月

8日（月・祝）午後2時～
大本東京本部開設50周年記念
東京大本歌祭

14日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

17日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　道院と大本の出合い
～提携95年の歴史に学ぶ～
講師　山田 歌（大本本部総務課長）

18日（木）午後7時
霊界物語全国一斉拝読会（第51回）

20日・21日（土・日）
大学生社会人講座 en TOKIO

27日（土）午前10時30分
家庭平安祈願祭（第27回）

11月

4日（日）午前10時30分執行
開教126年 大本開祖大祭遥拝祭

11日（日）午前10時30分執行
大本東京本部開設50周年記念・
東光苑秋季大祭
新穀感謝祭・七五三詣り

21日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　ズームアップ「現代の大本」
～映像撮影を通して伝えたいこと～
講師　斉藤安隆（大本ビデオ制作室員）

24日（土）・25日（日）
東光苑葬祭研修会